新　刊　Book reviews

□テオプラストス（著），小川洋子（訳）：**植物誌 2** 195 × 145 mm. 671 + 24 pp. 2015. 京都大学学術出版会．￥5,000 + 税．ISBN 978-4-87698-490-9.

『植物誌』は，植物学の始祖と謳われるテオフラストスの代表的著作である．訳者はギリシア語をカタカナ表記するに当たって，φ は π と区別しない立場に立っているため，テオフラストス（『岩波世界人名大辞典』2013 年など）ではなく，テオプラストスと記する．

古代ギリシア時代では著作は人手により書写され広まった．同書の写本は Loeb Classical Library の De causis plantarum（植物原因論）を英訳した Benedict Einarson，あるいは本翻訳書の原本著者 Amigues の研究によると，ギリシア語写本にはヴァティカンの Urbinas graecus 61（11 世紀），フィレンツェの Laurentianus 85, 22（15 世紀）など 10 種ある他，Theodros Gaza（1398–1478 年）によるラテン語訳（1450–51 年刊）なども存在する．日本語訳としては，先の Loeb Classical Library の A. Hort による Enquiry into plants 校訂本を翻訳した，大槻真一郎・月川和雄訳『植物誌』（1988 年，八坂書房）がある．この訳は英訳もある同文庫ではあるが，原典のギリシア語から翻訳されたもので，訳出にともなう不明部分が少なく，すぐれた訳本ということができる．

今回，新たに小川洋子が本書訳出を試みる契機になったのは，モンペリエ大学名誉教授で 1980 年来テオフラストスの研究を行ってきたアミグ (Suzanne Amigues) の研究成果と 2003 年パリの Les Belles Lettres から 4 冊本として出版された女史による新校訂本の出現にあったであろう．実際本書はアミグの新校訂本を翻訳の底本としている．

古典学研究にコメントする資格は評者にはないが，『植物誌』に登場する植物や植生・生態についてのアミグの研究の多くは植物学上からも納得のいくものである．その古典登場植物の研究論文を集大成した Études de botanique antique（2002 年）には，地中海の植生と植物相研究の第 1 人であるエクス - マルセイユ大学の Pierre Quézel 教授が序文を寄せているほどだ．これまで実体が不明とされた植物の正体解明に挑み，アミグはその多数を明らかにしてきた．

大槻・月川訳では正体が不問にされた植物の多くが特定され，今日いうところの何種かが記されている．例えば，6 巻 1 章の章末近くに書かれた「ある人たちが ‘ ネズミ殺し ’ と呼んでいる植物」では，従来これをトリカブト属植物とする説（さすがに Hort もこの説は採用していないが）にたいして，記述された形態と合致しないことやギリシアには同属の種がほとんど産しないことを指摘したうえで，別科のセリ属 (*Oenanthe fistulosa*) と断定されている．こうした例は枚挙に暇がない．

7 年前に刊行された『植物誌 1』に続く，今回の『植物誌 2』も訳は平易であり，その注釈は詳細を極める．植物学の原典ともいえる本書の邦訳として，単に字面の置換だけでなく，訳出上の問題をえぐり，未解部分はそれを謙虚に示すことを試みた意義は大きい．早い『植物誌 3』の出版を期待したい．本訳書冒頭の口絵 14 葉に訳者が描いた多数の植物画が載る．植物学的に正確で，本書にふさわしい清潔な印象を与える作品だが，欲をいえばもうひとまわりは大きいと一層効果的で良かった．

最後に，訳者も指摘しているが，本書は（特に本誌の読者にとって），『植物誌』という語が内包する一般的なコンテンツとはかけ離れている．原題を περί φυτών ίστοριών (teri phyton historion) といい，ラテン語訳の Historia plantarum は原題に近い．しかしここでの history の語は歴史ではなく，英語の Enquiry into plants などの訳にみるように，‘ 探求 ’ もしくは ‘ 調査 ’ を意味している．もし本書に新たにより適切な表題を与えるなら，訳者もそう書いている『有用植物の研究』とする案に私も賛成したい．　（大場秀章 H. OHBA）

□伊藤元己：**植物分類学**　A5. 145 pp. 2013．東京大学出版会．￥2,800 + 税．ISBN 978-4-13-062221-9.

東京大学理学部植物学教室へ入った頃，柴谷篤弘氏の「生物学の革命」が出版され，核酸レベル生物学の新天地の到来が告げられると，専門課程の選択に迷う学生に対する分子生物学への勧誘が，「より本質的な分野」として，俄に強まったのを記憶している．それから半世紀，APGIII の体系が発表され，高等植物でも DNA の分子配列に基づく分類体系を取り入れる時代となった．本書はそういう移行期に当たって，植物分類学全体

を新たな視野から概観するものとなっている．

1. 分類学とはなにか，2. 種と種分化，3. 系統進化，4. 被子植物の系統と分類体系，5. 系統地理学，6. 分類学と情報学，の6章より成る．

どの章でも，日本における最近の研究成果も引用し，併せて大陸移動も含めた地球全体の種分化も話題に載せて，従来の「分類学」の教科書とは味の異なる作品となっているので，一読の価値がある．

あえて私の縄張り内のことに触れれば，124頁の「経度・緯度の地理情報」の項で「古い情報やGPSを使用していない情報には，なんらかの形で経度・緯度情報を取得する必要がある」として，地名辞書の必要性を述べておられるが，及ばずながらそれに応える作品，国土地理院:数値地図（地名・公共施設）や金井：日本地名索引などがあることを，紹介してほしかった．ただし私は，経緯度を伴わない産地記録に，分単位（人によってはそれ以下）の「精密な」位置情報を与えるのは，よろしくないと思っている．他の「精密な」位置情報と共に，数的解析の場に取り込まれてしまうからである．

分岐図に限らず，系統図を見るたびに，なぜ二次元なのかな？と思う．紙という媒体に表現するには，何ごとも一平面上に展開せざるを得ないが，そうして描かれた結果のどれか一つしか受け入れねばならないのだろうか？昔から見慣れた「系統樹」だって，三次元（もしかするともっと多次元）の樹木を「おし葉」にして，枝ぶりを見ていたのだから，そういう見方が当たり前になってしまった．モビールという芸術作品がある．棒の両端に異なるイメージを吊り下げ，両者のバランスがとれる位置に支点を選んで，上位のイメージセットを吊り重ねるという方法で，何段階もの分岐図的作品ができる．この作品は，見る角度（あるいは投影方向）によって，全く異なるイメージを与える．われわれは，何らかのリクツに基づいて，近くに置かれた二つのモノは，遠くに置かれたモノより「近い」と感じ，そういう配置から得られるイメージによって，遠近関係を認識しようとする．しかしそのとき，どんな座標系を使っているか，どんな投影法を使っているかは，あまり気にしない，というより，自分の主張に都合の良い座標系や投影法を選んでいるように思う．「系統」というものは，私にはもっと多次元な時空の出来事で，その中のどれか一つの見え方のみが真であるとは言えないのではないかと思う．1982年「生物学研究の動向」という総合研究の討議資料とするために，植物分類学会会員に意見を求められた際，「何が中心課題かと問われても，そういうことは座標軸と原点の取り方によって様相が異なるので，『これが唯一の...』という議論は不毛である．」という趣旨の意見を述べたことがあるが，もちろん見向きもされなかった（日本植物分類学会会報**4**(6):19–22）．予算の分捕り合戦の場に，そういうピンボケのはなしは無用だったのだろう．

（金井弘夫 H. KANAI）

□青木淳一：**自然の中の宝探し** B5. 181 pp. 2006. 有隣堂．￥1,200＋税．ISBN 4-8660-195-5.

著者の専門はダニ．それも落ち葉を食べて腐植土を作ることを専門としているササラダニである．会社や集団の会誌のような，気の置けない刊行物に発表した40編ほどの短編で，のびのびと本音を吐露している．日本中を54区画に分け，5万分の1図に出ている神社マークにレンタカーで乗り付け，その「鎮守の森」のダニを調査する，というやり方で，日本全国2900地点を30年かけて調査したら，300種近い新種を見つけたそうだ．観察会のときには，参加者に「昼弁当は白いご飯だけ」と指示し，現場で見つけたキノコやオタマジャクシやダンゴムシを調理して，食べてもらうのだそうだ．トンボやセミは，空揚げに限るとのこと．植物とは関係なさそうな本だけれど，「取ってはいけません」との自然保護のスローガンを聞きなれた耳には，肩の力が抜ける思いがする．

（金井弘夫 H. KANAI）